

高田昇教授を送る

立命館大学政策科学部長 見上 崇 洋

いつも本当に若々しく活気にあふれた高田昇先生がもうご定年だというので驚いている。いや実は驚いているというような他人行儀な言い方ですまされるのではなく、政策科学部としては困惑しており、非常に残念に思っている。

高田先生は、1990年に立命館大学産業社会学部に赴任され、政策科学部創設後1995年から政策科学部の中心的なスタッフとして活躍してこられた。政策科学部が全国に先駆けて先進的な学問大系の構築をめざそうとすると、当初から関わり、まさに政策科学部とその誕生から成長していく過程をともしてこられた。

高田先生は既存のディシプリンでいうと建築学のご出身であり、建築やまちづくりの分野での実践的な経験を豊富にお持ちである。学部創設以降、政策科学の考え方であるとか内実がどこまで煮詰められたかについては議論もあり、また検討すべき点は多々あろうが、問題解決・現場対応という視点を特徴とする政策科学にとって、高田先生の実践的なご経験は貴重であり、学問的にも欠くべからざるものであった。

誤解を恐れずにいえば、高田先生のご業績は、建築学あるいは対象が漠然としすぎているまちづくり学という表現では不十分であると感じている。私に正確に論じる能力はないが、建築学とかまちづくり学というラベルを貼ればすむわけではないと考えられるからある。ある地域のいわば総合的な在り方をデザインするといった志向からすれば、多様な要素が関わってくる。その場合、旧来の言い方をすれば、社会科学的な要素をも無視してはまちのデザインなどはできない。そういった現実に課題となる実に様々な要素に幅広く目配りをし、その地域に合った諸要素を的確に取り入れて絵を描く、そしてそれを方法化していくことこそ高田先生の学問の特徴であるといえよう。つまり、具体的な場で、そしていろんな段階において様々な人たちの関わりと手法を具体的に想定してシステム化するところに高田先生の方法の輝きがあり、その意味で政策科学の現場志向的側面のひとつのモデルを見せていただいているといってもよい。高田先生において市民参加論は研究の中で最も重要な概念であるが、通り一遍のよくスローガンとしてお目にかかる市民参加論とは異なり、具体的場における具体的参加者の具体的行動を

その場に合わせて目に浮かぶように想定したものであるということができる。そして分析対象となる要素は、コミュニティ、経営、公的支援、NPO、デザイン、環境等々と非常に幅広い。このような高田先生のお仕事を拝見すると、あらためて政策科学の一端を担われることを意識的に追求されていたことが明瞭に理解されよう。

政策科学部10周年記念に、洋洋館前を改装して木製のアーチをつくって植樹などした。今ではツタも壁をつたい、環境に優しい姿を見せている。この構想も高田先生のリードによるものであり、当時、先生自らスコップを持って作業されておられた様子が思い浮かぶ。

このように政策科学部の成長をリードしてこられた高田先生の業績や志向をひきついで精進し、さらに立派な政策科学部を創っていくことが残された者に課せられる重い使命であることを痛感している。高田先生に対し、これまでの多大なご貢献に心から感謝申し上げ、ますますのご活躍を祈念申し上げるとともに、本学部のさらなる発展を見守っていただきお力添えを賜るよう切にお願い申し上げます。